
仮面ライダーカブト in the 桂 ヒナギク

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーカブト in the 桂 ヒナギク

【Nコード】

N8293L

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

七年前に地球へやってきたワームは、そこで殺した小学生のヒナギクに擬態して人間社会に溶け込んだ。そして現代、マスキドライダーシステムを盗み、ZECT潰しを宣言するのだった。

1・盗まれたカブト

今から七年前……平成九年八月中旬の事。宇宙より飛来した巨大な隕石が渋谷に墜落してその一帯は壊滅した。そこは今も瓦礫の山となったまま放置されている。

隕石が落下した直後から、地球侵略を企むワームと言う地球外知的生命体が現れる様になった。彼らは擬態能力で自らの姿を人間に変え、且つ記憶さえも完全にコピーして人間社会に浸透していった。杉並区の私立白皇学院高等部に通う二年生の生徒会長……桂^{かつら} ヒナギクもその一人である。

金の髪留めを付けた桃色の長い髪に端正な顔立ちの少女、元いヒナギクは白皇の時計塔^{ガイデングート}上部にある天球の間と言う生徒会室に居た。大きな机の前に腰掛けて白皇に関する書類を整理している。

入り口の扉が開き、水色の短い髪に女の子の様な顔をした少年、綾崎^{あやさき} ハヤテが現れた。

彼はヒナギクの正体を知る唯一の地球人で彼女の子分である。と言うのも、彼は以前にヒナギクがワームに姿を変えて人を襲っている所を見てしまい、それに気付いた彼女がハヤテを脅迫したからだ。「ご苦労様です」

ヒナギクは書類から目を放してハヤテの方を見た。

「ひょっとしてもう下校時間かしら？」

「それはもうとつくに過ぎてますよ。外を見て下さい」

ヒナギクは振り返って外を見た。その先にはバルコニーがあり、その向こうに見える空は完全に日が落ちていて暗かった。

「来るのが遅いんじゃない？」

「すみません……」

「いや、別に良いけどさ」

そう言ってヒナギクは書類を片付け席を立つた。

「鞆は持ってきた？」

「持ってきましたよ」

ハヤテはヒナギクに鞆を渡す。

「今日も殺るわよ」

ハヤテは顔を顰^{しか}めた。

「そう言うのはもう辞めませんか？ もしヒナギクさんがZECTに見つかりでもしたら殺されるのは確実です」

「ZECTといえど所詮はただの人間。クロックアップが出来るワームに適う筈が無いわ」

「それがそうもいなくなってるんです」

「どういう事？」

「遂にマスクドライバーシステムが完成したんです」

「何それ？」

「まだ一つだけですが、ワームのクロックアップに対抗する事が出来るパスワードスーツです」

「面白そうなお宝ね。是非とも手に入りたい」

「それじゃあ僕が奪い取ってきて上げましょうか？」

「いや、呼び出した方が早いわよ。取り敢えず、街へ行きましょう」
「分かりました」

ヒナギクはハヤテと共に学校を出て街へ向かった。

秋葉原にワームが大量に出現した。

ワームは逃げまどう人々を次々に殺害していく。

そこへやってくる一台のワゴン車。その車の中から、男が一人出て来た。

男の手元にはベルトが一本。ZECTが対ワーム用に開発したマスクドライバーシステムだ。

ワームたちは男の方を向く。

男はベルトを腰に巻き、右手を空に掲げた。すると、そこへ手の平サイズの赤いカブトムシ……カブトゼクターが飛んできた。

カブトゼクターは男の手に収まる直前に方向転換を行った。

「おい!？」

男がゼクターを目で追った先には、ヒナギクが立っていた。

ヒナギクの手にはベルトが握られていた。それは、男がたった今装着した筈の物だった。

男は自分の腰からベルトが消えてる事に気付いて言う。

「それは俺のベルト!」

「へえ、これがマスクドライダーシステムか。どんな代物が試してみようじゃない」

ヒナギクはベルトを腰に巻くと、周囲を飛び回るカブトゼクターを捕まえた。

「変身!」

ゼクターをバツクルにセットした刹那、

「Henshin」

スライジ・カジリアの様な声色のマシンヴォイスが発せられ、マスクドライダーシステムが起動してヒナギクの全身を黒いスーツと白銀の装甲が包み込んだ。

繭を彷彿させる異形……仮面ライダーカブト・マスクドフォーム
コンバウンドアイ
への変身が完了すると、青い目が白く光り輝くと同時に衝撃波が放たれた。

「うわあ!」

衝撃波を食らった男が吹っ飛ぶ。

「お前、何なんだよ!？」

「異星からこの地球を侵略する為にやってきたワームよ。我々に刃向かった事を後悔しなさい」

カブトが言うと同時にワームが男に接近した。

「水島、車へ戻れ!」

男はワゴン車へ乗り込もうと立ち上がった。

カブトは銃と斧が一体になったカブトクナイガンを取り出すと、男に弾丸を発射した。

男は弾丸をかわし、緑色の怪物へと姿を変えた。それは、七年前に宇宙からやってきたワーム。しかし、ワームとは違って頭部に角が生えていた。

「ネイティブか」

カブトはゼクターの角を百八十度展開した。

「Cast off」

白銀の装甲が弾け飛び、カブトムシの背面を彷彿させる赤いライダーフォームが露わになった。

「ネイティブには消えて貰うわ」

カブトはそう言つてサイドバックルを叩いた。

「Clock up」

クロックアップを発動したカブトは、目にも留まらぬ速さでワームに似た怪物……ネイティブの懐へ入り込み、空中へ蹴り上げた。ゆっくりと宙に舞い上がるネイティブ。

「One two three」

と、カブトはゼクターに付いた三つのフルスロットルを左から順番に押し、ゼクターホーンを倒してパワーをチャージ。

「ライダーキック」

カブトはゼクターの角を戻し、落ちてきたネイティブに回し蹴りを叩き込む。

「Clock over」

その電子音と共にカブトはクロックアップの世界から抜け、ネイティブが爆裂霧散した。

「水島——っ！」

ワゴン車に乗っている別の男が叫んだ。

「貴様！」

ワゴン車から男が出て来てカブトに銃を向ける。カブトがクロックアップで男に体当たりをした。
「うわあ！」

男は宙に舞うと、地面に落ちて転がった。

「ZEECTは私が潰す、そう上に伝えなさい」
カブトはそう言い放つと、クロックアップで立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293/>

仮面ライダーカブト in the 桂 ヒナギク

2010年10月8日23時20分発行